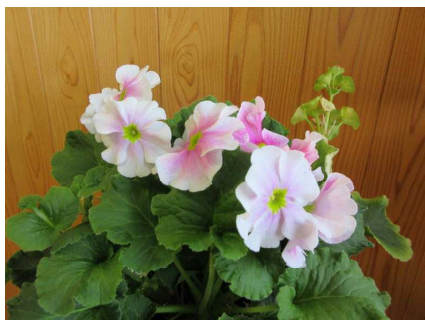


## 校歌の速度

校長 嶋見 靖之



今日は二十四節気の啓蟄です。冬ごもりしていた地中の虫がはい出てくる時期という意味です。校長室にはプリムラの花が咲いています。春の訪れを予感させる3月です。

昨年は新型コロナウイルス感染拡大のため3月4日から臨時休校を行いました。以降全国的な感染拡大の波が何度か押し寄せる中、子どもたちは手洗い、マスク着用など予防に毎日頑張りました。学校生活では全校が同じ場所で歌を歌うことができませんでした。始業式・終業式の校歌は各教室で歌いました。そして24日に挙行する第74回卒業証書授与式では、感染拡大防止のため、卒業生と保護者、在校生代表の5年生、そして教職員が参列し時間を短くして行い、マスクを着けて校歌を歌います。

校歌は、子どもたちをはじめ相川小学校にかかわるすべての人たちの誇りとする歌です。2月の全校朝会は校歌の速度について子どもたちに話しました。

相川小学校の校歌はおよそ90年前の1930年（昭和5年）につくられました。新潟県出身の文学者相馬御風の作詞、「シャボン玉」や「砂山」などの曲を作曲した日本を代表する作曲家中山晋平の作曲です。

ずっと歌い継がれてきた校歌ですが、現在使っている楽譜と約50年前に相川小学校創立100周年を記念して発刊された「相川の百年」に載っている楽譜に違うところがあることに気付きました。50年前の楽譜には速度を表す「♩=86」（1分間に86回打つ速度）の表示があるのです。現在使用している楽譜にはこの表示がありません。実際現在歌われる校歌は♩=86より少し速いのです。

マーチングでも校歌の旋律を演奏しますが、その速度が中山晋平が設定した速度に近いのです。私には旋律の線が美しく、タツカのリズムが力強く堂々としていて格調の高い曲に感じます。子どもたちには、「♩=86」が中山晋平のメッセージであること、速度をはじめ音楽を感じ取って校歌を歌ってほしいことを話しました。

歌は心の太陽であり人の心と心をつなぎます。校歌を大切にしていきたいと思います。